

## 【85】河川と寄生虫

昭和という時代が終わろうという昭和63年(1988)のことです。当時の水資源開発公団九州支社(現、水資源機構)から、筑後川沿川の“日本住血吸虫”が駆除されたという発表がありました。

日本住血吸虫というのは筑後川下流、利根川下流、信濃川・阿賀野川下流などの大河川の下流域や山梨県など盆地の地域など、低湿の水田地帯に見られる寄生虫です。わが国の低湿地や河川には、この日本住血吸虫をはじめ肝臓ジストマ、ツツガムシなど寄生虫病がはびこり、稲作に従事する農民を主体としてその地域の住民は、文字通り有史以来長年苦しめられてきたのです。

日本住血吸虫は中間宿主の宮入貝(ミヤイリガイ)から幼虫が水中へ泳ぎ出て、人間や牛馬にも皮膚を通して体内へ侵入するという恐ろしい寄生虫です。九州では、筑後川下流域の住人は、子供が川で水泳ぎしても感染するということで多くの人々がこの寄生虫の保有者でした。根本的な対策は、宮入貝が好んで棲みつく川岸や水路をコンクリート張りにすることで、水資源開発公団は、取水堰の「筑後大堰」建設の関連事業として長期間にわたり、取水路、導水路のコンクリート張りを進めてきました。

水資源開発公団に限らず、当時の厚生省も水路のコンクリート三面張り事業の補助金を出しており、東京では三面張りは水辺の自然環境の破壊の元凶として評判が悪いのに、処変われば品変わるものと九州在勤の私も感心したものです。また、河川整備が進んで高水敷と低水路が区別され、高水敷が乾燥化して湿地が無くなることも宮入貝の駆除の効果になり、その面からも筑後川の改修事業は歓迎されたのです。

いずれにしても、長年の努力がみのり、日本住血吸虫病にかかる人が年々減少し、社会的にマイナーな話題になりつつあったので、せつかくの水資源開発公団の発表もメディアや世間の注意を引くところになりませんでした。地元の久留米医科大学には日本で唯一といわれた“寄生虫学講座”があったのですが、今はどうなったのでしょうか。